

幕末西洋砲術史料概要

1: 文書群番号	082008
2: 文書群名	幕末西洋砲術史料
3: 出所	-
4: 家業・役職等	-
5: 地名	-
6: 行政区分	-
7: 歴史	砲術とは大小の銃器・砲の射撃、および火薬に関する知識・技術を総合的に学ぶもので、近世初期から武芸のひとつとして流派が多く生じた。幕末、幕府・大名が国内・領内の鉄砲整備や砲台築造を急ぎ西洋技術を積極的に導入、従来の和流砲術にかわって西洋式が主流となっていく。尼崎藩は西洋式砲術として高島秋帆の鉄砲術を採用、文久期以降に高島流鉄砲による農兵調練や銃隊編成を実施し、大高洲新田など五カ所に砲台を築造した。
8: 伝来	昭和57年（1982）4月古書籍商より購入、平成16年（2004）3月に整理・目録作成を完了した。
9: 史料入手先	古書籍商
10: 点数	6点（目録件数6点）
11: 年代	近世（幕末頃）
12: 構造と内容	本文書群は幕末の西洋砲術に関する書物（写本）と、西洋式砲台の図面である。前者の『砲要集成 前篇』は当時の新式鉄砲や砲台の図面・仕様・鑄造法、火薬の製法や砲術訓練の事例などを記したもので、尼崎関係では武庫川表でのモルチール砲（西洋式大砲）試射訓練の記事がある。後者は西洋砲台の全体図および砲台内各部分（陣営・火薬庫など）の図面類である。いずれも砲台の名称や築造年代、図面の作成年代について記載はない。
13: 関連史料	-
14: 閲覧条件	原本
15: 作成者	松迫寿代